

UCSDより (2) 研究室・日常生活編

University of California, San Diego 栗木 一郎

さて、U.C. San Diego の Vision Lab. に顔を出すようになって早や2カ月、ようやく私も研究室外の人の顔を認識するようになりました。Vision Lab. の人はなんとか私の名前を覚えてくれたのですが、それ以外の人はまず Ichiro という名前を把握するのが無理で、何度も聞き返した挙げ句、次に会った時は忘れていたという感じでした。さすがに顔は覚えてもらえているようです。ただ、状況はどちらも同じなので、お互いが知っている第三者がないと、2度目に会った時に互いに Hi!, how are you doing? と言ったきり絶句するということがあります。初めて会って自己紹介するときは、まるっきり Family name を無視するので、日本人の私にとっては未だに違和感があります。しかし、逆に日本人の知り合いで名字は知っていても名前を知らない人がどれだけいるか考えてみれば、納得もいくというものでしょう。私も MacLeod 教授は Don と呼んでいます。私の日本での指導教官の内川先生も、Bob (Boynton) に言わせると Keiji となるわけですが、Don と話していて内川先生の名前が出ると Don も私も Dr. Uchikawa と呼んでいます。Anstis 教授も Stuart と呼ばないと変な顔をされますし、あまり先生、生徒というかしこまった状況は感じられません。会話のなかで時折、第三者をフルネームで呼ぶことはあります。例えば、Rochester 大学での Mary Hayhoe の講義は眠くてつまらなかった(マツ談)、とか。

Don と私は OSA (Optical Society of America) の発表や ARVO (Association for Research in Vision and Ophthalmology) の予稿の手直しを頼んだり、実験の企画を話し合うので、よく discussion をする機会があります。私の関心分野である色恒常性の研究をしている Richard

(Brown) とは、顔を会わせる度に様々な色覚現象と色恒常性の問題などをああでもない、こうでもないと話合っています。Richard とは研究課題以外にも話をする機会が多いのですが、まだ英語表現が未熟な私は時折口を挟んでは首を傾げられて話の腰を折られまくっています。それでも最近は何とか全員の言うことが聞き取れるようになっただけ良くなったほうで、当初は Andrew (Stockman) の発音が聞き取りにくくて“あとで実験装置を見せてあげるね”と言われたのを3回聞き返して唾然とされたことがありました。

各個人のオフィスがあることは前回に記しましたが、研究室と呼べる一群の部屋は心理学科の建物の地下にあり、6部屋の実験室と、縦に長い会議室が1部屋あります。この会議室は Vision Lunch と呼ばれるミーティングや学会の発表練習、あるいは誰か訪問者が講演をする時に使われます。Vision Lunch は週に1回程度の頻度で、誰かが研究成果の発表などを昼食時に行なうという形式で開かれます。私の OSA の発表練習もここで行なわれました。実験室には CRT や光学系が無造作に置かれています。締め切りになる部屋が3つあり、Don と Ph.D コース4年目の Sheng-He のレーザー干渉縞のマクスウェル視光学系の実験装置の部屋、Andrew のマクスウェル視光学系の“喋る”実験装置の部屋と、私が来る前まで Harvey (Smallman) が使っていた部屋です。3つめの部屋は比較的大きく、奥に Harvey の実験装置だったマッキントッシュがあり、その手前にマットがマクスウェル視光学系を組んでいます。Post Doc. の Richard と Ph.D コース4年目の Doug (Willen) の実験は、不幸にも通り道になってしまっている部屋の計算機で行なわれています。むろん、実

験の時は締め切ってしまいますが、

これらの部屋は建物内の廊下に3箇所と、建物の外への出入り口が1つあり、あとは全てつながっています。Vision Lab. から廊下にでる3つのドアの鍵は全て共通で、建物の外に出るドアの鍵は心理学の建物共通の鍵になっています。建物のセキュリティに関しては神経が配られていて、夕方6時以降と土日は全ての建物の鍵は閉められて、鍵がなければ入れません。心理学の建物のエレベーターは1Fの出口が建物の外にあるため、建物が閉鎖されると同時にエレベーターの操作キーがOffになり、エレベーターキーがないとエレベーターに乗っても上がることも下がることもできません。大学院生以上は\$20のデポジットを払えばエレベーターキーを持てます。Vision Lab. の内部でも締め切りの部屋の鍵は必要な人以外は持っておらず、私が鍵を持っている部屋はHarveyの部屋だけです。Vision Lab. と外部との全てのドアには、ドアノブの上に被せて鍵穴を隠すClam shellというカバーがあり、その鍵がないと建物の外部から入るドアノブに到達できません。心理学の建物の鍵はエレベーターキー同様、大学院生以上は全員持てますが、このClam shellの鍵がないとVision Lab. には入れない仕掛けになっています。私のOfficeにもClam shellが取付けられています。

現在、ARVOに提出する予稿の発送が終わって、新しい企画の実験に取り掛かっています。CRTを使った実験なので、C言語のプログラムさえできれば誰でもできるような実験です。単純な実験原理のために結果が明確なせいも、予備実験の結果を見せた時のDonの興奮のしかたが予想外に激しいので、私はビビっていますが。これから行なう実験や研究の成果に関しては帰国後の学会で報告できると思います。

プロジェクトのテーマが固まってみると、日常生活は、平日が多少のんびりしている他はほとんど日本にいるのと変わらず、週末に遠出をしたり買い物などを行っています。大学の近くには車で約10分という圏内にスーパーマケッ

トを含んだ通常の規模のショッピングモールが3つ(La Jolla Village Square, Costa Verde, La Jolla Colony Plaza)ありますが、その他にUTC(University Town Centre)というデパート4軒と高級ブランド店が目白押しという大型ショッピングモールが1つあります。週末のモールは買い物をする客でごった返しており、特にUTCでは、昼過ぎには広大な駐車場で空きをさがしてさまよう車が蛇行した列を作っているという有様です。モールは大学から内陸の方に位置していますが、海岸の方へ行ってLa Jollaのdowntownに出ると、中心街のProspect streetにはHard Rock CafeからUnited Colors of Benettonを経て、Tiffany & Co.まで、これまたブランド店が目白押しです。

San Diego市内にはヤオハンという有名なスーパーマーケットがあり、ここではほとんどの日本製品が手にはいるばかりではなく、日本語による情報のやり取りの拠点ともなっています。ヤオハンと同じ建物の中に旭屋書店もあり、日本の雑誌、文庫本など全て手に入ります。生ラーメンが食べなくなったりすると、その隣のComputer Cityに行きがてらヤオハンに車で行って買い物をします。しかし、英語が喋れない、または、読めない人以外にとっては日用品が高いというデメリットがあるため、私もヤオハンにはあまり行かず、通常の食事の材料などは近くのスーパーマーケットですませていきます。

スーパーマーケットの様子は規模が日本より大きい、天井が高い、という以外は、医薬品を売っていること、レジで小切手を切る光景とビニール袋か紙袋か聞かれるのが違うでしょうか。小切手での支払は、金額、宛名、サインが全て手書きのうえ、州の運転免許証のID番号を店員が写したりしているので時間がかかります。大学から一番近いモールにあるRalph'sというスーパーマーケットは10あるレジの一番端が、10品以下で現金のみ、というExpressのレジになっていて、大概の私の買い物はここですんでしまいます。

最初、スーパーマーケットのレジで plastic bag? と聞かれた時は袋がいるのか? と聞かれていますのだと思っていましたが、paper or plastic? と聞かれて初めてわかりました。アメリカはエコロジーコンシャスな所があり、スチレンペーパー、ガラス瓶に関しては徹底的に分別回収をしています。ビニール袋も例外ではなく、大学の購買部でも Do you need a bag? と聞かれます。No, thank you と言うとエコロジーに貢献していることになるのか、Thanks と言われます。これは“ありがとうございました”ではなく、それに相当する文句として Have a good (nice) day! というのがその後につきます。

日本では袋に入れた物は金を払った事の証明になるわけですが、アメリカでは、袋いりません、という選択肢もあるため、万引きと疑われる可能性があるところはバックやバックパックの持ち込みを嫌がります。大学の購買部には入り口にバックパックを置く棚とコインロッカーがあり、スポーツ用品店、コンピュータ店では買い物が終わるまでレジで荷物を預かるというところもあります。普通の人、車のトランクに置いてくるか何かの手段で店内には持ってきません。

現在は寮生活ですが、寮の支払いプランの中に大学の食堂で週何食かフリーパスというプランがあって、私は週10食というプランを選択しています。平日の昼食と夕食をそれで済ませているため、料理は朝と週末にするくらいなので買い物は週1回程度です。寮は8つのアパートメントが入っているビルディング6棟からなっていて、我々は一人部屋4室+キッチン+リビング&ダイニング+バス+トイレのアパートメントを共有しています。同じアパートメントを共有しているのはイラン人と上智大学から来た日本人の学部生、オーストラリア人大学院生と私の4人です。今のところ、4人ともばらばらの生活リズムのため、全くばらばらに食事をとったり外出したりしています。そもそも、最初は私とオーストラリア人、香港人の大学院生の3人だったのですが、香港人の大学院生が

香港人コミュニティの住みよい所を学外に見つけたらしく、入寮5日目に出ていってしまいました。しばらくは私とオーストラリア人の2人でしたが、日本人学部生とイギリス人の学生が入ってくるようになりました。しかし実際に入ったのは日本人の彼だけで、その2週間後になってようやく現在の住人のイラン人が入ってきて、これで落ち着くのだと思います。

一緒に住んでいる期間が長い順に住人の説明をしましょう。オーストラリア人のビルは中南米のコスタリカと現代音楽が好きです。ちょっと風体が特殊で、くだんの香港人はそれにショックを受けて出ていったという説も成り立つほどです。熊のような体格に赤毛の長髪を後ろで束ねて不精髭、擦り切れたシャツとコットンのズボンで軍靴の様な底の厚い編み上げの靴をはいてドカドカと歩き回ります。話し合うと実に気分のいい奴です。いつぞやはスペイン人の彼女を連れてきて、夜中の2時まで音楽をガンガン掛けまくっていたかと思うとやおら出て行って、次の朝に帰ってくるまで彼女とビーチに寝ていたと言います。完全に誰も彼にはついていけませんが、週に1回食事をみんなに振る舞うのを続けている限りは、みんな彼を友人だと感じるのではないのでしょうか。

上智大学から来ている北海道出身のタカシは、典型的日本人学部生ですから特に記すことはありませんが、私とは英語でしか話そうとしない、というのは変わっているかも知れません。一応、互いの意志の疎通は英語でできているので問題は生じていませんが、彼の偉いところは、その英語を駆使してすでに金髪の彼女を作っているところでしょう。訪問してくる友人の数が一番多いのも彼です。彼には私の持っているマッキントッシュの PowerBook (ラップトップ・コンピュータ)を見せてアモをし、新しいPowerBookを買わせてしまいました(この時もむろん、英語で)。彼とはプリンターの共有も予定しています。

イラン人の学部生バーベックは(ほんとかどうか知りませんが)日本人の女の子と結婚寸前

までいったことがあるという話で、その女の子が作ってくれたお寿司が好物だったので今も寿司が一番好きだと、大学への道すがら大声で話してくれました。実際、彼の醤油の消費量は私を上回っています。他にも、日本の映画やアニメをイランで良く見たとあって、日本には大変好意的です。結構向こうは日本の国に親近感を持っているようです。一時イラン人が大量に日本に押し寄せたのは、そのせいもあるかも知れませんが、寮にいる間はほとんど寝ているのではないかと思うほど静かで、実態はよくわかりません。

寮(International House)は、アメリカ文化に親しむという目的から、住人の40%がアメリカ人です。全体の約80%は学部生で、大学院生は約20%弱です。大学院生は結構寮に帰ってからの仕事もあるのですが、学部生は気楽なもので、私のいる建物では週1回は何かパーティを企画して騒いでいます。とても全部つきあっていられません。Progressive dinnerなどに時折参加しています。未成年の飲酒に関しては非常に神経を使っており、未成年の飲酒を誘発しないように、バルコニーなど外から見えるところで飲酒してはいけない、という規則があります。

International House は先に記した建物が20棟集まったPepper canyon apartments という地域の一部(6棟)で、しかもこの地域は基本的には学部生のための寮なので、未成年もいっぱいいるわけです。新学期が始まった当初はハイスクール気分の抜け切らない学部生の騒ぎが続き、それには少し閉口しました。しかし、毎日ただで泳げるプールがあるし、変に私生活に干渉されることがないのでこの寮にも満足しています。

いまはハロウィーンが終わって、Thanks giving と Christmas の企画で盛り上がってきています。

いつも、書き終るとネタがないなあとおもうのですが、書き出してみると結構出てくるものですね。でも、そろそろ何書いていいか分かんなくなってきました。

そんなわけで今は、ちょうど論文を書きたい

気分です。

今は Matt がデータ解析の結果を Don と検討するために、Macの前を離れている隙を使って書いています。彼も Don も目が三角になっていて、近寄り難い雰囲気です。あと3時間で Federal Express の pickup がくるとか言ってます。それでも、Richard に言わせると Don はもっと遅い便を知っているはずだとか…。

ここはもう修羅場なので、office に退散します。

それでは、また。

栗木一郎 (KURIKI, Ichiro)

Department of Psychology
University of California, San Diego
La Jolla, CA 92093, U. S. A.

日本の連絡先:

東京工業大学大学院総合理工学研究科
知能科学専攻内川研究室

E-mail: kuri@int.titech.ac.jp; Radio: JM1CPZ